

あいまいな憑依

ペルー・クスコの都市部におけるクランデーロの事例から

岡本年正(東京大学大学院)

本発表は、ペルー共和国・クスコ県・クスコ郡の都市部において、クランデーロと呼ばれるシャーマンのような存在の呪術師が儀礼的に行う憑依を事例として、そこで起こる憑依のあいまい性について検討する。

憑依は世界中に存在し、文化人類学においても現在まで注目されている現象のひとつである。これまでの研究では、象徴的な研究においては、儀礼としての憑依そのものを、それが行われている社会のコスモロジーから読み解いたり、逆に憑依から当該社会のコスモロジーを分析したり、一方で憑依を社会的なものとして見出し、憑依を行う、もしくはされる者の社会的な立場から機能的にその意味を考察したりもした。他方で、憑依を、それが行われる儀礼の場も含めて演劇とみなして、そのパフォーマンス性と意味の分析、そして技能としての憑依の身体化についての考察もなされてきている。また、特に医療人類学の分野では、憑依と身体についての研究が進んでいる。憑依そのものを分析対象とするよりも、憑依という現象から見える人間の身体と自己に対する洞察がなされているのである。そこでは、憑依が近代医療の範疇に組み込まれ精神病の一種として医療化される過程の中で、近代医療の身体をモノとして、つまり自己から切り離されたものとしてみなすことへの反省を促しつつ、身体と自己のあり方についての洞察を与えている。

ところで、一言で憑依といっても、そのかたち、度合いはさまざまである。というのも、憑依が起こる場で、誰が憑依されているのか、たとえばシャーマンが憑依されているのか、被憑依者が患者としてシャーマンのところに連れてこられているのか、もしくはそういったことは別に憑依が起こっているのか。そしてその憑依は、どの程度儀礼的であり、どの程度演劇的なものであるのか。この違いによって、研究の視点は異なってくる。

ここで扱うクスコ都市部のクランデーロの憑依は、実にあいまいな憑依である。被憑依者は、治療師、もしくは占い師としてのクランデーロである。クランデーロは彼らを訪ねてきた人々の抱える問題(病気、借金、人間関係など様々なこと)を解決するために、*Apu*(アンデスにおける伝統的信仰の山の神格の総称)に憑依される。憑依される場合は真っ暗な部屋であり、相談をする人々は何も見ることができないのである。クランデーロに憑依する*Apu*の存在は、*Apu*がやってくる時に聞かれる羽ばたきの音、それからクランデーロの声の変化と*Apu*自身が名乗りであることのみ知ることができる。つまり、ここで憑依されている場面は被憑依者としてのクランデーロも含めて誰も見ることができず、相談者が音として知覚できるだけである。*Apu*による治療でも、決して相談者は触れられることなく進行し、憑依の終わりは*Apu*が去ることを告げ、再び羽ばたきの音があることで終わる。明かりが点けられると、そこにはクランデーロがいるだけであり、憑依が実際にあったかどうかを知る由も無い。

ここでの憑依は、クランデーロに*Apu*が憑くというよりも、クランデーロが*Apu*を憑かせているという形であり、クランデーロ自身が憑依の場をコントロールしているといえる。つまり憑依があまりに人為的であり、その真正性に疑問を挟む余地が生まれる。そして暗闇は、視覚を奪われることで信じるしかないというよりも、むしろ疑念を呼ぶものとなる。しかし実際は、相談者によってこの憑依の真偽は問題となることは無い。

実際は被憑依者を通して*Apu*との会話が実現されているが、このあいまいな憑依は視覚を奪うことにより、仲介者としての被憑依者を介さず*Apu*と直接対峙しているという印象を相談者に抱かせる。そしてその*Apu*への信仰と畏怖が、この状況を実現させるクランデーロの力に対するそれへと重なり、あいまいな憑依であるにも関わらず、全幅の信頼を置くことになる。クランデーロが演劇的に憑依を行っていたとしても、相談者にとっては憑依を越えた*Apu*との対峙ととられる。そのような状況の中では、憑依はクランデーロが*Apu*に「憑かれる」というよりも、*Apu*という存在をクランデーロとその相談者それぞれの自己の中に「創りだす」ものとなるのではないだろうか。「創りだされた」*Apu*はそれぞれのものなので同じ*Apu*とは言えず、その点でズレが生じているといえる。そのズレこそが、この憑依のあいまい性を成立させ、憑依そのものも成立させているのかもしれない。

【憑依、クランデーロ、クスコ】